



恵み豊かな大地と人がおりなすおもてなしのまち 上川町



上川町基礎データ

総人口	3,295人 (R 4. 2 月末現在)	漁獲高（金額ベース）	21,244千円 (R 2 推計（町集計））
高齢人口（高齢化率）	1,535人 46.59% (R 4. 2 月末現在)	製造品出荷額	809百万円 (R 1 工業統計)
世帯数	1,907世帯 (R 4. 2 月末現在)	卸・小売年間販売額	3,839百万円 (H28経済センサス)
人口密度	3.14人／km ²	一般会計規模	5,603百万円 (R 4 当初予算)
面積	1,049.47km ²	町の花	えぞつつじ
農業産出額	2,000百万円 (R 1 農業産出額推計)	町の木	アカエゾマツ

上川町の紹介

北海道のほぼ中心部に広がる本町は、日本最大の山岳公園「大雪山国立公園」の玄関口として古くから親しまれ、層雲峡温泉をはじめ、愛山溪温泉、高原温泉など3つの温泉郷を有し、北海道第一の河川、石狩川の源流部に位置する豊かな自然に包まれた町です。

本町は、明治28年から開拓が始まり、大正13年1月に愛別村から分村し、上川村が誕生しました。当時の人口は4,112人、世帯は750世帯でした。昭和27年9月より町制が施行されました。

昭和29年9月に発生した台風15号（洞爺丸台風）は、層雲峡奥地の原生林をはじめ、町内に8,136万m³の風倒木を発生させましたが、5年余を要したこの処理事業が、本町に空前の活況をもたらし、人口は15,289人（昭和35年）まで増加しました。しかし、台風15号のもたらした被害は木材資源を失ったばかりでなく、処理事業を終えた時点から人口の減少が止まらず、令和2年度には3,500人まで減少しました。

昭和32年に国道39号（大雪国道）が開通、その後も道路などのインフラが順次整備され、

昭和47年に国道273号が開通、昭和50年に大雪ダムが完成しました。

昭和62年度から平成13年度にかけて、層雲峡地区再開発事業が行われ、建物の色彩・デザインが統一されるなど景観の統一が図られた現在の街並みが形成され、平成11年度には国土交通大臣表彰「手作り郷土賞」を受賞しました。

上川市街地では、平成14年度から平成28年度にかけて上川駅周辺で土地区画整理事業が行われ、道路整備と街並みの統一が図られたところです。

「旭ヶ丘プロジェクト」の推進

上川町の南西部に広がる丘陵地、旭ヶ丘地区は、かつては畜産基地として大規模な草地整備が進められてきた農業地帯でしたが、大雪山を望むこの地区の景観と農業との調和を図りながら、壮大な景観を活かした新たなまちづくりを進めるため、平成22年に「旭ヶ丘地区活性化計画」が策定されました。平成26年には、大雪山を一望することができる高台に「大雪森のガーデン」がグランドオープンし、フレンチの巨匠・三國清三氏がオーナー

シェフを務めるガーデンレストランやヴィラも併設されました。平成27年には日本最大規模のガーデンショー『北海道ガーデンショー2015大雪』が4ヶ月にわたり開催され、道内外から多くの観光客で賑わいました。



レストラン「フラテッロ・ディ・ミクニ」



レストランに併設するヴィラ

また、平成29年、レストラン「フラテッロ・ディ・ミクニ」の代表取締役でもある塚原敏夫氏が、三重県で製造を休止していた酒造会社を買い取り、上川町に移転して、北海



上川大雪酒造日本酒（地元限定「神川」）

道で12番目の酒蔵となる「上川大雪酒造」を設立しました。北海道産の酒造好適米と大雪山系の麓で採取される天然水を原料に醸し出される日本酒は、“飲まさる酒”として道内外から高い評価を受けており、令和3年2月には地元限定で販売されるブランド「神川」純米が、「北のハイグレード食品2021」に選定されました。10年以上をかけて整備が進められてきた「旭ヶ丘地区」は、昔から変わらぬ雄大な大雪山を望みながら、町の新たな観光地として今なお進化を続けております。

「世界に誇る山岳リゾート」をめざして

上川町では現在、大雪山とその周辺に展開する豊富な観光資源を活用し、アドベンチャートラベルを基軸とした「世界に誇る山岳リゾート」をめざした地域のブランド化に取り組んでおります。夏は登山やラフティング、冬は犬ぞり体験やスノーアクティビティといった体験ツアーの充実化を図るほか、層雲峡温泉街に程近い層雲峡オートキャンプ場には、令和元年度より、コテージや炊事棟といった週末移住拠点施設を整備し、令和4年春から日本最北の通年型キャンプ場として本格オープンを予定しております。



スノーアクティビティ（犬ぞり）

これらの町の動きに呼応するように、大雪山の魅力を活かしたい民間企業との連携も進んできております。令和3年3月には、アメ

リカのアウトドアブランド「コロンビアスポーツウェア」とアウトドアの力で持続可能な地域社会の構築を目指す包括連携協定を結びました。この協定では、コロンビアが持つアウトドアのノウハウや人材、ネットワークの活用を通じて、交流、定住、関係人口の創出を図り、山岳リゾートタウンの更なる充実をめざしております。また、令和3年10月には、世界を旅しながら学び、海外への進学・キャリアや起業を目指すグローバルスクールを運営する「インフィニティ国際学院」との包括連携協定を締結しました。同学院は、令和4年4月に層雲峡地区の休館しているホテルを利用して中等部を開校し、層雲峡を拠点に、大雪山の麓で自然豊かな環境下だからこそ実現できる地域課題解決やSDGsをテーマとしたフィールドワーク学習を展開することとしております。これらの大雪山に魅せられた民間企業との連携が「世界に誇る山岳リゾート」を目指す町の政策と相まって、新たな雇用や活況をもたらしております。



通年利用できる層雲峡オートキャンプ場

地元唯一の高校を支援

上川町には道立の上川高等学校があり、昭和27年に道立旭川東高等学校の上川分校として開校し、平成14年からは、道内初の中高連携一貫校として地域に開かれた特色ある教育を推進してきましたが、少子高齢化の中で生徒数が年々減少し、令和2年、3年と2年連

続で入学者が20人を下回りました。北海道教育委員会の配置基準によれば、令和4年度に入学者が20人を下回れば、統廃合の対象となることから、令和3年3月には「上川高校魅力向上推進協議会」を関係者で立ち上げ、生徒が行きたくなる、保護者が行かせたくなる、地域が活かしたくなる高校を目指し、町と高校が連携した上川高校魅力活性化プロジェクトに取り組んで参りました。このプロジェクトでは、既存授業の見直しや地域資源を最大限に活かした宿泊研修プログラムの開発をはじめ、地域おこし協力隊と生徒が協働で高校パンフレットやポスターを作成するといった、地域と密着した高校活性化の取り組みを実施して参りました。また、令和4年度からは、従来年間2名に限定していた海外派遣研修事業を、希望者全員へと拡充するほか、新1年生からはじまるGIGAスクール構想に備え、対象者全員にタブレット端末を無償貸与するなど、従来の通学支援等に加え、様々な支援を充実させた結果、令和4年入学予定者は25名と配置基準を上回りました。今後においても、さらなる魅力向上の取り組みを推し進め、上川高校から地域を支えてくれるすばらしい人材が多数輩出されるよう、町としても支援を続けて参ります。

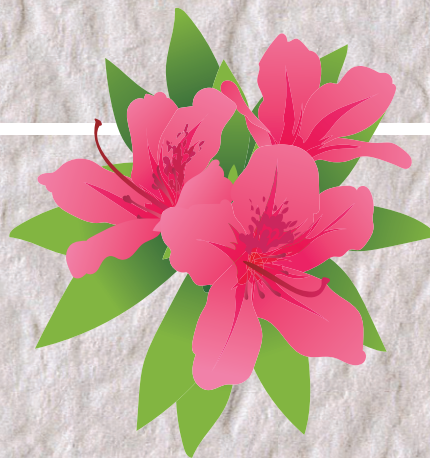


上川高校の取り組みの様子（ポスター作成）

上川町の四季



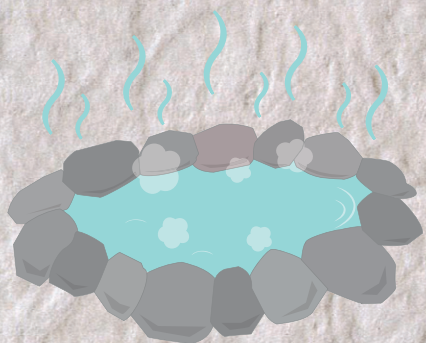
【春】春の上川公園



【夏】大雪森のガーデン



【秋】滝見沼



【冬】氷瀑まつり